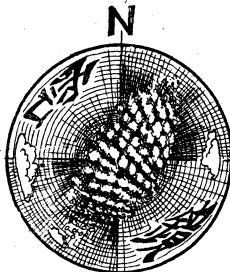


生活気象

ラジオの天気予報の聴取率を調べてみると、農村では浪曲や「三つの歌」を破って第1位を占めているのに、都会では遙かに下位に甘んじている。これは農業が気象の影響を受けることが大きいばかりでなく、日々の農作業を行う上に予報を利用しているが、都会の人はその日常生活に予報をどう利用するかをよく知らないからである。産業気象の重要性は、民間天気会社が企業化された今日、別に述べるまでもないが、日常生活に対する天気予報の利用ということは、出勤前に傘を持っていくかどうかをきめる助けにする程度であることが多い。しかし我々の日常生活の型式は、その地方の気候に支配され、毎日の生活の実際はその日の気象に左右されていることを知るならば、生活気象ということに、日常生活の合理化のためにもっと真剣に考えるべき問題である。東京の三つの放送局は週3回生活気象放送を行っているが、このような仕事には気象台ももっと力を入れるのが、気象事業に対する広汎な市民層の支持を強くする上からも必要である。現在朝日新聞は夕刊の天気予報欄に予報関係の解説をのせ、読売新聞は地方版に農業気象を連載してそれぞれ好評を得ているが、生活気象をとり上げる新聞がそろそろできてよさそうなものである。(AM)

「圧力……感じますね」

ブレイズ・パスカルはトリチェーの真空の説明を知りひじょうに興味をおぼえた。自分でも実験してみたが、ついに故郷の義弟にたのんで近くの山パイ・ド・ドームに水銀気圧計を持って行って測ってもらったところ、予想どおりの結果になった。1648年9月19日のことであった。山の高さは1465mで、山頂の水銀柱の長さは平地の値より7.5cmすくなかった。こうしてパスカルは大気の圧力を感じとり、やがてパスカルの原理の発見となったわけであろう。すなわち「密閉した器の中の静止流体の一点の圧力がある大きさだけ増すと流体内のすべての点の圧力は同じ大きさだけ増す」というのがそれである。トリチェーからパスカルまでの圧力問題の発展過程は歴史的にもきわめて興味深いものがある。がとりわけ注目したいのは「自然は真空をきらう」としたアリストテレス以来の真空観がおよそ2000年の間ほとんど無批判に信じられておったということと、その伝統に対してパスカルがどのような圧力を感じておったかという点である。この一点に着目してパスカルの著作、書簡を整理すればきわめておもしろい科学史の研究テーマになるであろう。「暴力は、自己の世界をこえて、一切のものを支配しようとのぞむことに成り立つ」とした彼はまた「強いものと美しいものとは衝突する」と見ている。(O₂)



気象異変

先日婚禮に田舎にまねかれていった時老人からきいた話に、今年は桃、山櫻、八重櫻などが一時に咲き出したから、この夏も何か異変があるのではないかということであった。中国の諺にもこれを述べたものがあるそうで、教えてもらったのであるが、だいぶ酒がまわっていたので漢学の素養のない私は忘れてしまった。有名な諺だそうであるから、御存知の方は御教示ねがいたい。昨年は春先のケヤキの芽の出方が違っていたので、夏のことを心配していたが、はたして冷害に見舞われたのだそうである。しかし今年はケヤキは異常はないそうであるからその点は安心していいとのことであった。

現在は太陽黒点の極小期にあたっていて、ウイレットやシェルハグの説によると東西循環が強勢になるはずである。今年の冬は昨年の12月から確かに暖冬で、中緯度高気圧帯が異常に強く、どうやらこの説は実証された形で、昨今中緯度高気圧はかなりの発達を示している。今後の見込については変化の機構がわからないので、何ともいえないが、何かこの保償といったようなものが現われそうな気もするのである。

今日役所からの帰りに電信課の窓外にあるツツジが満開なのを見て、その開花がたいへん早いことから田舎の老人の言葉を思い出したのであった (1954-4-12)

コレクションとセレクション

気象の研究に限ったことではないが、研究に必要な資料を集めるのはゆるがせにできない事項である。コレクションが終ってからその資料を整理してセレクションが必要である。この二つの一見相対する行為があってはじめて研究の第一歩が進められたといえるであろう。ところがこの両行為にしても研究であるためには、主観的な行為が入ってはならない。作為なコレクションに、作為なセレクションが行われたのではいやくも科学の研究として本質的な点で疑われることになり致命的な欠点となる。しかし実際には無意識の中に作為行為が入ることがよくある。一つ一つのデータを集める時も、せめて視野で顕微鏡をのぞく時も完全無作為は不可能に近いことであろう。それでも行為にはおのずから限度がある。あらかじめ結論はこうあるべきだというのを立てておいて、それにありコレクションとセレクションを行ったなら、どんな結論でも出せるのではなからうかという懸念さえおきる。はなはだらかつであったが、古文書の研究でコレクションとセレクションが作為的か無作為的かが大きな討論問題であると聞かされて驚いたのはごく最近のことである。なにかに全然別の社会の話を聞いているようで妙にむずかしい思いをした。自然科学がいわゆる人文科学より科学的でない必要はあるまい。(O₃)